

# 堀田 雄大の図画工作科（第1・2学年）研究計画

## 1 本研究で目指す子ども

中央教育審議会の答申では、これからの図画工作科の授業で求められることとして「生活を美しく豊かにする造形や美術の働き、美術文化についての理解を深める学習の充実を図る」とある。次期学習指導要領でも、現行の「造形的な創造活動の基礎的な能力」の育成から、「生活や社会の中にある形や色などと豊かにかかわる資質・能力」の育成へと変更された。今後図画工作科では、作品をつくりだすための力を育成することはもちろん、これまで以上に、生活や社会の中にある様々な事物を、形や色といった造形的な視点でとらえていく力を育成することが重視される。

この力を発揮することで、子どもは身の回りにある事物を、形や色といった造形的な視点からよさを感じることができるようになる。例えば、当たり前のように見えていた木々や花に、より一層形や色の魅力を感じたり、普段何気なく飾られているものがつくりだしている雰囲気のよさを感じたりするようになる。これは、子どもが身の回りの事物に対する見方や感じ方を広げていくことであり、美しさや面白さを感じながら心豊かに生活することへとつながる。

そこで今年度は、生活の中にある身近な事物にかかわる造形活動において、**造形的な視点を基にイメージを広げ、表し方を工夫して表現する子ども**を目指す。具体的には、形や色に着目する、自分のイメージと表し方とを関係付けて考えるという「見方・考え方」を働かせて、テーマを基に表したいもののイメージを広げ、表現に必要な材料の特徴を生かして表す姿である。

これまでの図画工作科の指導でも、「身の回りの箱の形を使って動物をつくろう」「身近な出来事を絵で表そう」というように、身の回りにある形や色に目を向けさせ、そこからイメージさせる指導が行われてきた。しかし子どもは、イメージが曖昧なままですぐに表現に行き詰まったり、イメージに合う形や色を選んで工夫することができなかつたりした。これでは、造形的な視点を基にしているとはいえない。身の回りにある形や色に目を向けさせることが重視された結果、子どもに曖昧なイメージのまま「つくってみよう」と投げ掛け、見通しをもたせていないことが原因である。また、材料のもつ効果（赤い色で燃えるようになる、等）に目を向けさせていないため、子どもは自分のイメージに合う表し方の工夫を考えていくことができなかった。

そこで私は、子どもが身近な事物の中から、表したいものを具体的にイメージできるようにする。そして、表したいもののイメージと表し方とを関係付けて考え、表し方を工夫して表現することで、造形的な視点を基に活動できるように改善する。

具体的には、まず、子どもが身近な事物の形や色に着目して表現を行うことができる造形活動を設定する。例えば、身の回りの物をデザインして、飾ったり雰囲気を変えたりする活動である。次に、子どもが形や色を基にして、表したいものを具体的にイメージできるように思考ツール等を用いて、イメージを可視化していけるように働き掛ける。そして製作過程では、子どもが自他の作品のよさや面白さを感じ取りながら、よりよい表現のために表し方の工夫を考えていけるような相互鑑賞を行わせる。このように授業を展開することで、目指す姿を具現する。

## 2 本研究で育成する資質・能力

①知識・技能	②思考力・判断力・表現力	③態度
<ul style="list-style-type: none"> <li>○材料の形や色が表す効果に関する知識</li> <li>○基礎的な用具を扱う技能</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○自分の表したいことについて発想・構想する力</li> <li>○自分のイメージに合わせて材料を用いた表し方を考える力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○生活の中にある造形的な表現に気付こうとする態度</li> <li>○自他の作品の面白さや楽しさをとらえようとする態度</li> </ul>

## 3 主張する働き掛け

題材の導入では、魅力的なテーマを提示し、製作意欲を高める。子どもが「○○を表したい」という意欲を高めたら、試しの材料に触れさせながら「どんなものを表したいか」を問う。子どもは、「○○なものを表したい」「○○を表せそうだ」と言う。しかしまだイメージは曖昧であり、どのように表そうかという見通しをもていない状態である。

このような子どもに次のように働き掛ける。

### 働き掛け1

「なにが」「どんな感じか」という視点を基に、表したいものをイメージマップでまとめさせた後、再度表したいものを問う。

イメージを具体化し、問いをもたせるための働き掛けである。

曖昧なイメージをもっている子どもに、表したいものの特徴を考えさせるため「なにが」「どんな感じか」という視点を与え、思い付くものをイメージマップでまとめさせる。子どもは、**形や色に着目する「見方・考え方」**を働かせて、表したいものの具体的な部分や「○○な感じ」という特徴を想起し、イメージを具体化する（②思考力・判断力・表現力、ツール活用能力）。その後、再

度表したいものを問うと、子どもは「〇〇な感じの□□を表したい」と考える。このように表したいものを具体的にイメージしている姿を問いをもったとみなす。

#### 働き掛け2

製作に必要な材料を提示し、「どの材料を、どうやって表すか」と問う。

課題解決に必要な情報を収集させ、思考・判断・表現させるための働き掛けである。

表したいものを具体的に考えている子どもに、必要な材料を提示する。子どもは、「この材料は使えそうだ」「この材料は〇〇の部分になりそうだ」と考える。そして、表現に必要な材料と表現方法を考えさせるために「どの材料を、どうやって表すか」と問う。子どもは、「材料を並べたり、組み合わせたりすればできそうだ」等、イメージに合う表現方法を考える（②思考力・判断力・表現力）。材料を用いて、子どもが「並べる」「組み合わせる」等、どのような活動をすればよいか考えている姿が見られたら、見通しをもったとみなす。その後造形活動を促すと、子どもは、自分のイメージと表し方とを関係付ける「見方・考え方」を働かせて、自分のイメージに合った表し方を考え、製作する（①知識・技能、②思考力・判断力・表現力、③態度）。

#### 働き掛け3

表したいものの内容や表し方の意図を伏せた状態で、タブレット端末を用いた相互鑑賞を行わせ、その様子を動画で記録させる。

自他の作品のよさや面白さを基に、よりよい表現を考えさせるための働き掛けである。

一通り表現した子どもが、自他の作品のよさや面白さに気付けるように、タブレット端末を用いた相互鑑賞の時間を設定する。この鑑賞は、友だちの表したものの内容や表し方の意図を伏せた状態で行う。このような鑑賞活動を行うことで、子どもは友だちの作品をつぶさに見ることができ、自分なりの解釈をする中でそのよさや面白さに気付くことができる（②思考力・判断力・表現力、④協働性、⑤ツール活用能力）。また、撮影された記録を見直すことで、自分の意図とは違う解釈や、気付かなかったよさや面白さを知ることができる。そして、「次はもっと〇〇できそうだ」とよりよい表現方法へと目を向ける。

相互鑑賞の後、よりよい表現を実現させるため、再度造形活動を促す。子どもは、友だちの表現や、レポートされて気付いたよさや面白さを基に自分のイメージと表し方とを関係付ける「見方・考え方」を働かせて、製作する（①知識・技能、②思考力・判断力・表現力、③態度）。こうして、造形的な視点を基にイメージを広げ、表し方を工夫して表現する子どもとなる。

#### 働き掛け4

表現の過程が分かる写真や動画を提示し、「どんな作品ができたか」「どのように表したか」を問う。

発揮した資質・能力を自覚させるための働き掛けである。

出来上がった作品と、表現の過程を記録した写真や動画を基に、学習を振り返らせる。子どもは「イメージ通りの作品ができた」「〇〇がうまくいった」等、感じたことを話す。そこで、「どんな作品ができたのか」「どのように表したか」という視点で、表現過程を振り返らせる。子どもは、表現で行っていた行為、材料の使い方、工夫できた点を振り返り、発揮した資質・能力を自覚する。

## 4 検証

### (1) 検証すること

- ① 構想した働き掛けにより、想定したCnになったか。
- ② 構想した働き掛けにより、想定した「見方・考え方」を働かせることができたか。
- ③ 構想した働き掛けにより、想定した資質・能力を発揮することができたか。

### (2) 検証の方法

- ① 働き掛け2と3を受けて、身の回りにある様々な物の形や色を見立て、自分の表したいものと関係付けて考え、表現に必要な材料の特徴を生かしていたかどうかを、活動の様子や記録、実際の作品から検証する。
- ② 働き掛け1、2、3を受けて、造形的な見方・考え方が働いていたかどうかを、思考ツールの記述、活動の様子や記録から検証する。
- ③ 働き掛け1、2、3を受けて、設定した資質・能力を発揮していたかどうかを活動の様子や記録、実際の作品から検証する。

## 5 年間の授業計画

- (1) 指定研究授業 (6月) 「カタチからうまれる〇〇」(6時間)
- (2) 中間検討会 (9月) 「イロイロあるね カメレオンランド」(6時間)
- (3) 初等教育研究会 (2月) 「せかいに一つ マイハウス」(8時間)